
ハッピーエンド

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーエンド

【Nコード】

N2924E

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

組織壊滅後の未来。哀視点で、新蘭なのか新哀なのかはたまた一方通行なのかよくわからない、後味が悪いかもしれない話。完全なハッピーエンド以外受け付けられない方は遠慮されたほうがいいと思われます。

薫風が吹き始めた初夏の午後三時過ぎ。空は快晴。庭には新緑。

「阿笠」という表札が掲げてある、一人で暮らすには大きすぎる家で、哀はコーヒーを淹れていた。

香ばしい匂いが鼻にかかるのを感じながら、二つのカップにそれを注いだ。

吹き抜けのリビングには光が差し込んでおり、台所からそちらに向かう。

スリッパが床をする音だけが高い天井に響く。

光の真ん中に置かれた白いベッドには、一人の男が眠っている。

そこに着くと、側にある小さな丸テーブルにカップを置いた。

スタイリッシュなチェアに腰掛け、哀は片方のカップを取って口につける。

そのゆっくりとした行動の間も、側の男は眠ったままである。

しかし彼女は気にせぬまま、冷めていくであろうもう一方のコーヒーは放置し、何気なく部屋を見渡した。

すると、壁にハンガーでかけていた帝丹高校の制服のスカートがいつの間にか落ちていたので、拾いに行く。

プリーツに皺がよっていないのを確認して、もう一度ブレザーがかかっているハンガーに吊った。

この制服に世話になってもう二年目だ。

早いものだと感じながら、哀は男の元へ戻る。

見下ろせば、男の穏やかな寝顔。

青白くも見える顔からはあまり生氣は感じられない。それでも生きてはいるが。

「顔くらい拭いておこうかしら」

暫く見下ろした後、そんなことを思いついて、水に濡らしたタオルを持ってきた。

毎夜体は拭いているが、今日は特別な日だ。

真綿を触るような優しさで、静かに男の顔を撫でていく。

水を含んだ白い肌が出来上がり、先ほどよりも少しだけ”普通に眠っているように見えた。

それに満足して、彼女がタオルをテーブルにぼいと置くと、玄関のほうからインターホンが鳴った。

そのベルを予期していた哀は、驚くことなく、無表情で玄関に向かう。

扉を開けると、一人の女性と一人の女の子が立っていて。

薄い水色のワンピースを着た女性は、哀と目を合わせて微笑んだ。

「こんにちは、哀ちゃん」

「ええ、いらつしやい」

表情を崩さぬままそう答えると、下からも「こんにちは」という甲高い声が聞こえる。

視線を下にすれば、女性と手を繋いだままの少女が、大きな目をこちらに向けている。

それに対しては、少し間をおいた後、今度は若干目を細めて「こんにちは」と返した。

一年前に会った時よりも、背が伸びた少女はあまりにも無垢で、哀にはまぶしすぎた。

その隣で、女性が片手に持っていた紙袋を差し出す。

「あ、これつまらないものだけど……」

「あら、ありがとう。丁度今コーヒーを淹れたところだし、早速開けさせてもらっわ。さあどうぞ中へ」

「お邪魔します」

「おじゃまします」

老舗のカステラを女性から受け取って、彼女は二人を中へ促す。女性 of 真似をして行儀よくお辞儀をする少女の、スカートがふんわりと揺れた。

「博士はお元気？」

「ええ、月に一度米国から葉書が来るわ」

廊下で取りとめもないことを話しつつ、リビングに哀が先頭になって入れば、まだ男は起きないまま。

彼女がカステラを切りに台所へ行く一方で、女性は光の中心へと躊躇うことなく近づいていく。

目の前までやってくると、その手に引く小さな少女をベッドの前に立たせた。

「久しぶり、新一。ほらこの子、こんなに大きくなったわ」

新一と呼ばれた男は何の反応も示さない。

「明日はピアノの発表会もあるのよ」

蘭はそう言つて、少女の頭をいとおしそうに撫でた。

一方少女はくすぐったそうに肩を上げて、彼女を見上げる。

「ねえお母さん。この人今日も起きないね」

「そうねえ。でもちゃんと聞こえているから」

「ふーん」

一年間と変わらない目の前の男に首をかしげながらも、幼心にそ

ういうものなのかと少女は納得する。

そうして、蘭は側にある椅子に座りその膝に自分の娘を乗せて、眠ったままの彼に語りかけ始めた。

とても穏やかに、とても幸せそうに。

暫くして、皿に盛ったカステラと新しいコーヒーを持って哀がやってくる。

無言で丸テーブルに置き、代わりに放置したままの自分や新一のカップを引っ込めた。

蘭からお礼が言われるのを背後で受け取って、少し離れたところにある違った椅子に座る。

そして、蘭が優しい口調で話すのをぼんやりと見つめた。

すっかり大人の女性として成長した蘭は、その視線は気にしていないのか、娘を膝であやしなから返事の無い会話を続けている。

秘めやかな三人の空間。

そこに、哀は入る気も無かったし出来なかった。

光に朱色が混じり始めた頃、少女も眠ってしまったていた。男とは違い、舟をこぎながらの浅い眠りのようだったが、用を終えた蘭が、その腕に娘を抱いて玄関まで行くのを、哀も見送る。

抱いているせいで両手を使えない蘭のために、哀が少女の足に靴を履かせてあげた。

あたたかく柔らかいその感触に、なぜか心がざわめく。

だがそれを無視して、無表情で「またいらっしゃい」と言った。

蘭はにっこりと笑う。

「ありがとう。哀ちゃんも元気だね」

「ええ。貴女の旦那さまにもよろしく」

その言葉に、彼女は今日見た中で一番幸せそうな顔をして頷いた。

「わかったわ。哀ちゃんのこと、幸せそうだったと伝えておくわね」

また自分と新一以外になくなった家で、哀はカーテンを閉めた。しんと静まりかえるリビングに照明をつける。

蘭が座っていた椅子に同じように腰掛けて、新一を見る。

「彼女、今年も幸せそうで良かったわね」

無機質な声でそう言う。

蘭は毎年一回、こうやってこの家にやって来ていた。

新一が、眠り始めたこの日に。

数年前からは娘も連れて。

今年で娘は、江戸川コナンと同じ年になった。

「……全ては、貴方の願いどおりよ」

哀はそつと新一の頬に手を添える。

まだ、あたたかい。まだ。

いつそもう冷たかったらよかったのに。

そんなこそすら思う。

だが、それでも、自分は彼の側にいるしかない。

自分と新一が望んだ最善の繋がり、これだったのだから。

「十年前の今日、貴方は言っ たわ」

組織が壊滅し、完成した解毒剤を飲む直前、コナンの姿をした彼は蘭に伝えた。

「この薬で元の体に戻る確立は百パーセント。だけど”無事に”成功する確率は五十パーセント。そして残り半分は……死ななくても植物人間になる可能性が大きい。だから、失敗したら、」

——他の男と、幸せになっ てくれ

当然、蘭は首を横に振った。

失敗したとしても、ずっと側にいると。

だが新一は彼女の手を握って更に言う。

「愛してる。最初で最後の最愛の人だからこそ、おめーだけはずっと幸せで、ずっと綺麗でいてくれ」

震える幼い手で強く握り締め、懇願にも似た望み。

蘭はそのとき何を思ったのか。

ただ少しの間の後、小さく頷いたのが彼女の後姿から読み取れた。

危険な賭けを犯してまで、元に戻ろうとする新一の真意を蘭はわかったらしい。

ちなみに哀自身はこの体のまま、罪を償っていくことを決めていた。

苦しむ姿を見せたくないという彼の思いを尊重して、地下の実験室から蘭が出て行く。

解毒剤の開発者としてその場に残る哀は、一礼してすれ違う際の彼女の横顔から何を考えているのか読み取れなかった。

そうして二人だけになったコンクリートの部屋で、ついに薬を飲むとした時。

哀は思いついたように、軽い口調でこう言った。

「植物人間になったら、私が面倒みてあげましょうか」

失敗したらどうせ誰かが世話をしないといけないのだ。

本人が望まなくても、周囲が見殺しにはしない。

客観的に見ればかなり大事で、ある種告白に近い提案だったが、意外とすんなり哀は言うことが出来た。

我ながら、こんなことがさりとて言えた事に内心驚く。

しかし、おめーなんか世話されてたまるか、と断られるとも想像する。

一方、新一は一瞬目を丸くした。

そして次に、哀が予想していたのとは違う表情をして見せた。申し訳なさそうに、苦笑いしたのだ。

「……オメーがそれでいいなら、俺は嬉しい」

「ほんと、女ったらしにもほどがあるわ。あなた」

当時のことを思い出し、ため息をつく。

あの時、彼が自分や蘭に願ったことを哀は理解できなかった。でも今ならわかる。

新一が植物人間になってからずっと姿を見せなかった蘭が、結婚してから初めて会いに来たときに、やっと気付いた。

そう、彼は蘭とずっと”男と女”でありたかったのだ。

最初で最後の恋をした相手だったから。

植物人間になった惨めな自分を世話されるのは、望まなかった。

一人の男として、一人の女を愛してその人の幸せを願いたかった。そして女の幸せな姿を見たかった。

だから、蘭も”幸せになってから”新一に会いに来たのだ。

子供を産んでからも、逆に彼女はどんどん美しくなるようである。

「……つまり、私は貴方にとって女では無かったということね」

惨めな自分を晒せる存在。ということとは、つまりはそういうことで。

「それでも一応、大事には思ってくれたみたいだけど」

哀の気持ちに気付いていたからこそ、彼はあの提案に頷いたのだろっ。

新一は最愛の女の幸せを見ることができ、

蘭は最愛の男の願いを叶えることができ、

哀は最愛の男の側にずっといられることができた。

外から爽やかな風が吹いて、窓ががたがたと鳴る。
彼は、勿論起きない。

「幸せすぎて困る結末だわ」

吐き出すように言った彼女の言葉は、風の音の中に掻き消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2924e/>

ハッピーエンド

2011年1月4日15時39分発行